

Fancy Fragments of “Fantasy” Fitted For Feasible Facts Analogue

札幌市医師会
華岡青洲記念病院

はなおか けいいち
華岡 慶一

私は、学童期・思春期の心の葛藤を経て、結局、故郷札幌にて医学教育を受けて臨床トレーニングを積み、循環器内科医として働いてきた。今回、「母親の心原性脳塞栓による入院」を契機に——発症時の父の発言「もう十分生きた。楽にしてやれ」に反発して——自分と母親の関係を中心に書いてきた。それは、母の生命危機の対処を含めた全てが、まるで、今までの私の人生を評価されているかのように感じたからだ。

先ほど、母と父は、3回目のワクチン接種で、元気に来院した。発症からの1年間も、いろいろなことがあった。私には、COVID-19パンデミック(2020～)に始まり、アメリカ大統領選挙(2020)、ウクライナ侵攻(2022～)とこの2年余りに起きたことが偶然とは思えない。二人は、ブースター接種を終えて玄関脇の椅子に座り、仲良くタクシーを待っていた。その日は、大雪のために自家用車で来ていた。両親に「車で送ろうか?」「Drive My Car?」(玄関待合のBGMでは偶然ビートルズのその曲が流れていた)と言った時、タクシーが着いた。立ち上がった母はタクシーに乗り込む直前に、急に真顔になって私の耳元で囁いた。「あんまりお父さんにきつく言わないほうがいいよ。その後、結構落ち込んでいたから」と言ってから乗車した。36号線へ左折して去っていくタクシーの後ろ姿を見送りながら私は呆然と玄関で立ち尽くした。なんてこった(WTF)。そうだったことはわかっただろうに(……would've known that)。この1年、母親が助かった因果を辿っていろいろ書いてきた(親父に苦言も吐き)。子供の頃からの、潜在意識中の「エディプス・コンプレックス」「Baby you can Drive My Car. And maybe I'll love you.」は、とっくに克服できただろうに(……could've been overcome)。……ドゥルーズは機能すべきだった(したはずだった)のに(……should've worked)。

気がつくとBGMは、“Norwegian Wood”に変わっていた……。“Isn't it good Knowing She Would.”

最近、記事に関連した昔の写真を探してアルバムを覗いたら、父親が50歳過ぎに社内報に投稿した記事を見つけた。それは、父が自分の父親(私の祖父)に苦言を呈する導入だった! その話の——私とは違うオチだが——親子関係の問題構造は一緒だと思った。そこで母はなんと「あんまりお父様にきつく言わない方がいいですよ」と父を諭していた! 果たして我々はいつになったら「超人」になれるのか? 「未人」の輪廻はいつまで続くのだろうか……。

ポール・マッカートニーは、2018年のインタビューで、60年代後半の頃(グループの存続に関して苦悩していた頃)に、夢に亡くなった母親(彼が14

歳の時、死別した)が出てきて、“Let it be. It's going to be OK.”と言われ、救われた気持ちになった話をしていた(母親の存在意味)。あの時代、ビートルズは身近なBGMとして時々の空気に浸透していた。あの1980年12月8日の速報も5th. Av. Bld.の「TOWER RECORDS」(日本1号店)で聞(聴)いた。記憶を辿りながら、心の葛藤とは、対象がこの世にあってもなくても、結局は変化する心(成長・回帰)とその対象との距離感の問題であると思った。

……どこからか、“When I'm sixty-four.” @ Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Bandのサビが鳴った。そして、この続きは『64歳になったら』(私がジイさんになったら～)と先送り(目前だが……)することにした。

今回、昨年からの投稿を見ていただいた読者の方(女性の反響が多いのは母親ネタだから?)から、記事の内容に即して——母子の記憶のスーベニアとして——以下のようなイヤプレートをいただきました。服装、構図ともそっくりな写真があることに驚いています。ありがとうございます(当時、犬は飼っていませんが、1958年は成年でした)。そして、最後まで読んでいただいた皆様と読者を置き去りにするスタイル(と指摘されたこともある)のエッセイを掲載——商業雑誌と職業的作家ではできない——していただいた編集責任の先生と担当者の方から感謝いたします。

